

同志社大学 一神教学際研究センター

主催

公開講演会

トルコにおける世俗主義

—にして不可分の共和国 85 年の歴史は

瀬戸際に立つ

講 師

ないとう まさのり
内藤 正典

(一橋大学大学院 社会学研究科 教授)

日 時

2008 年 10 月 4 日 (土) 午後 1 時 ~ 2 時半

場 所

同志社大学 今出川校地 神学館 3 階 礼拝堂

お問い合わせ

同志社大学 一神教学際研究センター (CISMOR)

TEL: 075-251-3972 E-mail: info@cismor.jp HP: <http://www.cismor.jp/>

《プログラム》

司会 森 孝一（同志社大学神学部・教授）

1) 講演 内藤 正典（一橋大学大学院社会学研究科・教授）

「トルコにおける世俗主義 ーにして不可分の共和国 85 年の歴史は瀬戸際に立つ」

2) 質疑応答

《講師紹介》

内藤 正典（ないとう まさのり）

1956 年生まれ。一橋大学大学院社会学研究科地球社会研究専攻教授。

東京大学教養学部教養学科卒業、東京大学大学院理学系研究科地理学専攻修士課程修了、同博士課程中退。理学修士（東京大学）、社会学博士（一橋大学）、東京大学教養学部助手、一橋大学社会学部専任講師、同助教授を経て 1997 年より現職。1981-83 年にシリア、ダマスカス大学文学部客員研究員、1991-92 年にトルコ、アンカラ大学政治学部客員研究員。専門は中東の国際関係、イスラーム地域の社会学、ヨーロッパの移民問題。

主に NHK でトルコの政治状況の解説、コメンテーターとして活躍。また、NHK 教育テレビ「高校講座地理」の講師も務めている。

【主な著作】

『激動のトルコ、9・11 以降のイスラームとヨーロッパ』（編著）明石書店、2008 年

『イスラーム戦争の時代～暴力の連鎖をどう解くか』NHK ブックス、2006 年

『ヨーロッパとイスラーム』岩波新書、2004 年

「異文化のなかのイスラーム」、佐藤次高編『イスラーム地域研究の可能性』所収、東京大学出版会、2003 年

「非対称の戦争」を忘れたアメリカと中東再植民地化の危機、寺島実郎・小杉泰他（編）『イラク戦争、検証と展望』岩波書店、2003 年

【受賞歴】

日本地理学会研究奨励賞（1986 年）

トルコ共和国、国家功労賞（2007 年）

〈講演概要〉

「トルコにおける世俗主義 - 一にして不可分の共和国 85 年の歴史は瀬戸際に立つ」

一橋大学大学院社会学研究科 教授 内藤正典

建国以来の国家原則

トルコは、前身のオスマン帝国が第一次世界大戦で崩壊した後に、ヨーロッパ列強やギリシャとの激しい戦闘の末、共和国として 1923 年に独立を果たした。建国以来、トルコは近代的・西欧的な国家として、いくつかの原則を立てた。そのなかで、今日もなお、重要な争点となっているのが、「国土および国民が絶対不可分であること」と「世俗主義」である。二つとも、憲法で改正および改正の発議を禁じられた絶対的の原則である。

世俗主義とイスラームの不適合

しかし、トルコ国民の大多数はムスリムである。イスラームには、西欧が近代を経て確立した世俗主義の観念はない。トルコも、国家をあげて世俗主義の浸透を図ったものの、90 年代以降、徐々に、国や社会の制度をイスラームに適合するかたちに変革しようという動きが目立ってきた。90 年代半ばには、連立ながらイスラーム的改革を志向する福祉党が政権を掌握した。世俗主義の絶対的守護者である軍部と司法は、この政党を解散させた。しかし 2002 年、福祉党の一部を継承した公正・発展党が単独で圧倒的支持を得て政権を樹立した。2007 年には、同党出身のアブドゥッラー・ギュルが大統領に就任したが、歴代大統領のなかで、初めて、夫人がイスラームに則った服装をしているため、各種の国家行事でも軍幹部と同席しないという異例の事態が続いている。検察庁は、エルドアン首相の政権に対して、世俗主義原則に違反したとして解散を求めて起訴したが、2008 年、憲法裁判所は、有罪としたものの政党解散は認めず政党助成金の削減という判決を言い渡した。

不可分の共和国とイラク問題

他方、国土および国民を絶対不可分とする原則について脅威となっているのが、隣国イラクの将来である。イラク北部のクルド人地域は、自治政府を樹立し、独立への歩みを進めている。米国のイラク戦争と統治に協力したクルド人にとって、今回がおそらく独立への最後のチャンスとなろう。この動きがトルコ国内の多くのクルド人に波及しないか。トルコ国民のあいだには不安が広がっている。2006 年以来、北イラク側からクルディスタン労働者党 (PKK) が越境して、テロ・武装闘争を続け、トルコ軍と激しい戦闘が続いている。

政府は、「トルコ人」「クルド人」という民族的括りこそ、西欧が中東分割をたくらんだときの道具だとして、同じムスリムの兄弟としての融和を説く。

イスラーム圏唯一の世俗主義国家の未来

トルコの立場はきわめて難しい。元来、イスラームと親和性のない世俗主義を憲法原則とするため、民意が世俗主義に反する方向に傾いても、それを実現できない。つまり、現行制度を残す限り、トルコでは民主主義には一定の制約が課されている。他方、欧米諸国からみれば、米国主導の「テロとの戦い」にとってトルコが防波堤の位置にあることも間違いない。この矛盾した状況のなかで、トルコは歴史的な転換点に立たされている。

Memo